
カーボンフリーコンサルティング植林地情報 2008年秋

報告者 カーボンフリーコンサルティング株式会社

目次

1. 植林地に関する基本的な情報
 2. 中国内蒙古自治区の植林地の様子
 3. 植林するカラマツの苗について
 4. 内蒙古での植林風景
 5. お客様の森のご紹介
 6. 北海道十勝千年の森での植林について
 7. 植林事業部統括ディレクター 原からのメッセージ
-

1. 植林地に関する基本的な情報

植樹の場所: 中国内蒙古自治区、北海道十勝千年の森

樹木の種類: カラマツ、シラカンバ、ハルニレ など

植林開始日: 2008年春

植林地面積: 中国内蒙古自治区 1,000,000㎡

北海道十勝千年の森 1,000㎡

期間: 2008年~2047年までの40年間

2. 中国内蒙古自治区の植林地の様子

中心となる中国内蒙古自治区の植林地では以前は農耕地として50年以上にわたり使用されてきました。それ以前の植生を周辺で聞き取り調査したところポプラ、カラマツ、灌木類が自生していたことが判明し、その為、植林地にはカラマツを中心にポプラも植えております。カラマツの成長はポプラなどに比べると遅い反面、厳しい環境にも耐えることができます。この植林地の敷地面積は現在よりもはるかに大規模な植林が可能なので、今後広く展開をしていく予定です。



内蒙古自治区の植林地の様子1



内蒙古自治区の植林地の様子2

3. 植林するカラマツの苗について

内蒙古で植林されるカラマツの苗がどのように植林されているのかをご紹介します。苗は外気に触れると乾燥して、根づかなくなるため、対策として車に積むことで苗の乾燥化を防止しています。



カラマツの苗



苗を刈り取ります



乾燥防止のため車に積み込む



植林されたカラマツ

4. 内蒙古での植林風景

モンゴルでは、現地の中学生も植林活動に参加しました。森は環境保全のためだけでなく、多くの生物を育む場所です。

荒廃した大地に緑を植え、その意味を身体を遣って感じ取ることができる機会を提供し、植林のプロフェッショナルが正しい植林の仕方や森を育むことの素晴らしさを小中学生たちに教えます。

地球温暖化防止の為に、正しい知識と、実際の現場を知ることが重要だと考えられます。これは我が国の環境教育推進法の目的にも合致しているのではないのでしょうか。共に植林を行った中学生にお礼をしに学校まで訪問したところ、植林に参加した学生からは「とても楽しかった」「何も無いところに木が育っていくのが楽しみ」といった感想をいただきました。現地の教育がさらに充実してほしいという願いを込めて、サッカーボール、バスケットボール、バドミントンなどを贈呈させていただきました。



現地中学生による植林の様子

5. お客様の森のご紹介

お客様がカーボンオフセットを実施していただいたことによって創造された森に看板が立てられました。看板はお客様のお名前を記載しているため、現地に足を運んでいただいた際にも植林地のどこに森があるのかを確認していただけます。

2008年春

看板は 5月に建てられたものです。あたりは緑が覆い茂っていますね。



2008年秋

10月の景色が変わり、秋らしさが出てきました。春は緑だった森がこのように変化したにも関わらず厳しい冬を過ごすことによって春にはまた緑一面となっています。



6. 北海道十勝千年の森での植林について

北海道十勝千年でもこの秋、第一回植林ツアーが行われました。

この植林活動では、洞爺湖サミットで排出した CO2をカーボンオフセットするためにシラカンバ、やハルニレなどの 700本以上の木が植えられました。

笹が傾斜全体を生い茂っており、植林が困難なため、整地された半径5 m大のサークルに笹の根を耕し「天地返し」を行い、植樹可能な状態にしていきます。

また、北海道の植林ツアーでは木の苗であるナギ、オニグルミ、ミズナラをそれぞれ森で採取していきます。山にもともとある苗を使うことによって極力人の手がかからない自然な植林を実現しております。



北海道での植林の様子

7. 植林事業部統括ディレクター 原からのメッセージ

「現地を預かって」

自然を相手にする仕事は、思いもよらないことが起こるので恐ろしい。だからこそやりがいもあります。砂漠の気候はとても不安定。数年も続く大旱魃があるかと思えば、雨期に洪水が起きてしまうなど自然災害は、現場を熟知している者でも敵いません。しかし、事前に起こるであろう災害を予期し、対策をたて、現場に生かす方法はあります。それを見つけれられるかどうかは経験者と素人の違いとも言えます。海外での活動では、現地の人々との関係も重要です。たとえ植物を植えても、住民の理解を得られなければ伐られてしまうこともあります。貧困に苦しむ彼らの生活を考えれば、その行為は理解できます。そこで、闇雲に木を植えるのではなく、彼らの生活に強く結び付いた緑化。つまり何かのかたちで将来的の収入に結び付け、彼ら自身が緑地を広げようと思えるような活動が必要とされます。この点を考慮せずに行う植林は、必ずと言っていい程失敗します。現地の人々との信頼関係、将来的な展望、これらは現場の経験数がものを言います。

私たちの植林地は、中国内モンゴル自治区の貧困地帯に位置します。この地では過放牧や過開墾などにより、緑は急激に失われました。その問題解決と本事業最大の目的であるCO2吸収、そして現地の政



策にも沿った植林が植林者に求められます。

現地政策を考慮し、表土流出・黄砂飛散の発生地と考えられる地域を植林地に定め、CO2吸収に優れた現生種のカラマツを選択しました。そして現地の人々が活動に興味を持ち、その森を維持・拡大しようという意欲を出すために、カラマツの間に果樹類の灌木を多数植えております。これにより、植物の多様性も生まれると同時に、それぞれの相乗効果により、生態系は安定、土壌の固定化も図ることができます。この活動が 30年後、50年後に絶対的な実を結ぶ約束は誰にもできません。しかし、私は 15年間砂漠で得た技術・経験は最大限発揮しそれを成功に導いていく所存です。
